

「少子・高齢化社会を考える（１）」

小川 富之

目 次

- (1) 少子化か？非婚・晩婚化？（本号）
- (2) 非婚・晩婚の解消 少子化社会への対応は？
- (3) 高齢社会ではなく長寿社会
- (4) 長寿社会の法整備（その 1） - 介護保険について
- (5) 長寿社会の法整備（その 2） - 成年後見法について
- (6) 明るい少子・高齢社会 長寿社会と様々な家族

1．少子化か？非婚・晩婚化か？

・「だんご3兄弟⁽¹⁾」の大ヒットのかげにあるものは

・・・だんご3兄弟、だんご3兄弟、だんご3兄弟・・・。1999年初春から、軽快なタンゴのリズムに乗せて、この歌が爆発的に大ヒットしている。NHKの子どもの教育番組で最初に歌われていたものが、特にプロモーションもしないのになぜか国民の間に広まっていったと、当事者たちも驚いている様子である。実は、同じようなことが過去にも起こっている。「・・・毎日毎日僕らは鉄板の上で焼かれていやになっちゃうな・・・」子門真人さんの特徴的な歌声とともに記録的な大ヒットとなった「およげ！たいやきくん⁽²⁾」である。当時、歌謡評論家の先生方の中には、この曲のヒットと、日本の高度成長期の会社員の生活とを関連づけて説明するもの

があり、イメージとして会社のために毎日一生懸命働いているサラリーマンの姿がこの歌と重なった印象を持っている。「歌は世に連れ世は歌につれ」といわれるが、大衆に歌が広まるには何らかの理由が必ずあり、みんなに親しまれる歌は何らかの形でその時代を反映しているものであろう⁽³⁾。

「だんご3兄弟」なぜこんなにヒットしたのだろうか？この歌は世につれているのか、つまり現代社会を反映しているのか？世の中はこの歌につれているのであろうか、つまり現代（近未来）社会はこの歌を反映する方向にあるのであろうか？

少し意外に思われるかもしれないが、この「だんご3兄弟」の歌詞をはじめて耳にしたとき、思わず納得して、感心してしまった。今回のテーマである「少子化・高齢化⁽⁴⁾」という表現を最近非常に頻繁に耳にするようになったが、これについ常々疑問に思っていた。日本は、本当に「少子化、高齢社会」なのかという疑問であるが、この「だんご3兄弟」はこの疑問に対する答えのヒントを与えてくれた。私は、日本社会は「少子化・高齢社会」ではなくてむしろ「非婚晩婚化・長寿社会」と表現した方がよいと考えてい

たのであるが、この考え方が世間に潜在的に高齡社会を考える」という、どちらかという将来について悲觀的なテーマを掲げているが、内容としてはむしろ、「長寿社会⁽⁵⁾と様々な家族⁽⁶⁾」という、楽觀的な視点からこの問題を考えてみたい。本号では、序論として「(1) 少子化か？非婚・晩婚化か？」というタイトルで、現状分析および問題提起を行い、次号では「(2) 非婚・晩婚化の解消 少子社会への対応は？」というタイトルで、現代の重要課題の一つとされている少子化傾向への対策を検討する。

続いて、高齡化についてその法整備も含めて順次とり上げ、まとめとして、「(6) 明るい少子・高齡社会 長寿社会とさまざまな家族」というタイトルで、将来的展望を試みたい。

三人兄弟が増えている

ここ近年子どもの数が増えている⁽⁷⁾。特に、3人以上兄弟姉妹のいる家族の増加が指摘されている⁽⁸⁾。これに対して、子供が二人という家族は減少傾向にある⁽⁹⁾。国立社会保障・人口問

存在することを確信した。本稿では、「少子問題研究所の報告によると、子どものいる家族の約 34 パーセントに3人以上の兄弟姉妹がいるのである(表1参照、1997年度の調査によると、こども0人の3.7%を除く家族の34.16%に3人以上子どもが出生している)。10家族中3~4家族が「だんご3兄弟」ということになり、この歌は現代社会を反映していることになる。

結婚している夫婦に、将来何人子どもを持ちたいかというアンケートを実施したところ(表2参照)平均2.5人程度という数字が報告されている⁽¹⁰⁾。また、結婚生活の継続期間が長くなる

表1 調査別にみた平均出生次数分布の推移(結婚持続期間15~19年)

調査年次	0人	1人	2人	3人	4人以上	平均(標本数)
第7回調査(1977年)	3.0%	10.8	56.9	24.1	5.1	2.19人(1,426)
第8回調査(1982年)	3.2	9.2	55.6	27.3	4.9	2.23人(1,421)
第9回調査(1987年)	2.8	9.7	57.8	25.9	3.8	2.19人(1,760)
第10回調査(1992年)	3.1	9.3	56.3	26.5	4.8	2.21人(1,850)
第11回調査(1997年)	3.7	9.8	53.6	27.9	5.0	2.21人(1,334)

注：過去の調査については、厳密な比較のための再収集を行った。このためかこのほう告知値とはわずかに異なる。

なお、以下の表についても同様。

出所：国立社会保障・人口問題研究所、第11回出生動向基本調査

結婚と出産に関する全国調査(夫婦調査の結果概要)

表2 調査別にみた、結婚持続期間別、平均理想子ども数

結婚 持続期間	平均理想子ども数				
	第7回 (1977)	第8回 (1982)	第9回 (1987)	第10回 (1992)	第11回 (1997)
0～4年	2.42	2.49	2.51	2.40	2.33
5～9年	2.56	2.63	2.65	2.61	2.47
10～14年	2.68	2.67	2.73	2.76	2.58
15～19年	2.67	2.66	2.70	2.71	2.60
20～24年	2.75	2.60	2.71	2.69	2.67
25年以上	2.86	2.70	2.77	2.70	2.58
総数 (標本数)	2.61人 (8,314)	2.61 (7,803)	2.67 (8,348)	2.64 (8,627)	2.53 (7,069)

注：各回調査とも初婚同士で妻の年齢50未満の夫婦を対象として計算。過去の調査については厳密な比較のため再計算を行った。このため過去の報告値とはわずかに異なる。(以下の表も同様)。()内の標本数は理想子ども数、予定子ども数不詳を除いた数。

出所：国立社会保障・人口問題研究所、第11回出生動向基本調査
結婚と出産に関する全国調査(夫婦調査の結果概要)

ほど、理想の子ども数が多くなっている⁽¹⁾。意外に思われるが、9割以上の方が、子どもは2～3人はほしいと考えているのである。ほとんどの親が「だんご3兄弟」の家族を理想としていることになり、現代(近未来)社会はこの歌を反映していることになる。

それでは、なぜ少子社会といわれるのか。その理由は合計特殊出生率の低下である。合計出生率とは、女性が一生の間に生む子どもの数の統計で、これが1990年以降2.0を割り込んで1993年には1.5を割り、ついには1997年には1.39となり⁽¹²⁾、私たちは新聞・テレビ等の報道で大きなショックを受けた。最低でも出生率を2.08以上に維持しないと人口は減少してしまう。日本では平均寿命がずっと伸び続けているので、

このままの状態が続くと急激に高齢化が進み、深刻な問題を抱えることになるというのである。確かに、15歳未満の子供の人口は昨年よりも31万人減り、総人口に占める割合が初めて15パーセントを下回ったことを、新聞が報じている⁽¹³⁾。これは事実であるが、この合計出生率と、15歳未満と65歳以上の人口から問題を眺めることについては疑問である。15歳未満と65歳以上の人口の比較では高齢化社

会の問題解明は難しいと考えるが、この点については、次号以降で扱うこととし、まず、合計特殊出生率について考えたい。

結婚しないかもしれない症候群

合計特殊出生率とは、全ての女性が一生に産む子どもの数の統計である。この中にはもちろん0歳の赤ん坊から100歳（またはそれ以上）の女性の全てが含まれている。0歳の赤ん坊はすぐには子どもを生まないし、100歳（またはそれ以上）の女性も今のところ子どもは生まないであろう⁽¹⁴⁾。出生率の低下は少子化の要因であり、急激な低下は問題ではあるが、私たちが考えなければならないのは、実際の子どもを生む年齢層の人々の問題で、幼児やお年寄りについては今回の検討の対象から外してもよい。つまり、結婚している（しようとしている）女性、または、結婚はしないが子どもを産もうとしている女性とその対象となる。

少し前に、マスコミで「結婚しないかもしれない症候群」という表現が使われ、社会進出する女性の非婚化の傾向が指摘され話題となった。いずれは結婚するつもりと答える女性の数が減少し、結婚意思を持つ者のうちでも半数以上が「理想の相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」と答え、25～34歳の女性の65パーセント近くのもの、「まだ結婚するつもりはない」と答えている⁽¹⁵⁾。これに対して「ある程度の年齢までには結婚するつもり」と答える者が減少している⁽¹⁶⁾。この傾向は、近年未婚者の適齢期意識が薄らぎ、晩婚化の傾向が強まっていることを示している。この影響で、平均初婚年齢が着実に高くな

表3 平均婚姻年齢の年次推移

	全 年 齢		初 婚	
	夫	妻	夫	妻
	歳	歳	歳	歳
昭和50年	27.8	25.2	27.0	24.7
60	29.3	26.4	28.2	25.5
平成元年	29.8	26.9	28.5	25.8
2	29.7	26.9	28.4	25.9
3	29.6	26.9	28.4	25.9
4	29.7	27.0	28.4	26.0
5	29.7	27.1	28.4	26.1
6	29.8	27.2	28.5	26.2
7	29.8	27.3	28.5	26.3
8	29.9	27.5	28.5	26.4
9	29.9	27.6	28.5	26.6

り（表3参照）1997年には女性の平均初婚年齢が26.6歳となり⁽¹⁷⁾、近い将来27歳に達するであろう。また、結婚しないで独身でいる者も、20代から40代において上昇傾向にあり、非婚化傾向が強まっている⁽¹⁸⁾。実は、問題はここにある。

結婚した女性の大多数が 2~3 人の子どもをほしがっており、実際に産む子どもの数も二人以上で安定している⁽¹⁹⁾ことはすでに指摘した。日本では、女性が結婚しないで子どもを産むことにはまだ抵抗が強い。これらのことを総合すると、晩婚化と非婚化が進むことにより、平均特殊出生率の低下を来していることは明らかである。

(おがわ とみゆき / 広島経済大学経済学部助教授)

注:

- (1) 佐藤雅彦・内藤真澄作詞、内藤真澄・堀江由朗作曲で、NHKの「おかあさんといっしょ」の中で速水けんたろう・茂森あゆみの二人により歌われたもので、1999年4月5日現在のCD売り上げ枚数は累計で263万枚を記録して、なお販売数をのびし続けている。歌詞の一部を紹介すると「・・・いちばん上は長男長男、いちばん下は三男三男、あいだには生まれ次男次男、だんご3兄弟・・・」というものである。
- (2) 1975年のヒット曲で、総売上枚数約450万枚で、シングル・レコード日本最高売り上げ枚数を記録している。
- (3) 朝日新聞に100回にわたって連載されたシリーズ「愛すべき名歌たち」(1997年4月から1999年5月)で、阿久悠氏は戦後のヒット歌謡曲とその当時の社会の動きを軽妙なタッチでまとめている。彼のこのエッセイでは多くの人々に受け入れられる歌はまさにその時代を映す鏡で、「歌は世につれ世々は歌につれ」ということが指摘されている。
- (4) 日本はすでに少子化の段階および高齢化の段階は通り越して、正確には少子社会およ

び高齢社会の達しているが、とりあえず本稿では子ども(15歳未満)の数が減り続けている現状および高齢者(65歳以上)の数が増加し続けている現状を表現する用語として使っている。

- (5) 1999年は国連の「国際高齢者年」に指定され世界の国々で高齢者問題に取り組む都市とされている。世界中で人口の高齢化が進んでいる中で、国連では「高齢者の自立・参加・ケア・自己表現・尊厳」の5原則を、「全ての世代のための社会をめざして」いる。私たちが長生きするようになり、高齢者として過ごす期間が長くなり、その生活の充実を図ることの重要性の認識が求められている。
- (6) 1994年は国連の「国際家族年」で、様々な形態の家族を認め、「家族からはじまる小さなデモクラシー」がテーマとして掲げられた。
- (7) 最近の出生次数を見ると、1997年は1,191,667人、1998年は1,196,639人、1999年は1,202,258人と、若干ではあるが増加している(総務庁統計局人口推計月報による)。
- (7) これ以上子どもを産む可能性がほとんどなくなった時点における夫婦集団の平均出生次数を完結出生次数(または完結出世力)と呼ぶが、国立社会保障、人口問題研究所の調査結果によると、結婚持続期間15~19年の夫婦の出世児分布で、3人または4人以上子どもを生む夫婦の増加が指摘されている(国立社会保障・人口問題研究所「第11回出生動向基本調査・結婚と出産に関する全国調査・夫婦

- 調査の結果の概要」8項)。
- (9) 前掲調査結果の概要
- (10) 夫婦が理想的な条件のもとで何人の子どもを持ちたいか(理想子ども数)につき調査を行ったところ、1997年には若干減少しているが、おおむね2.5から2.6で安定している(国立社会保障・人口問題研究所「第11回出生動向基本調査・結婚と出産に関する全国調査・夫婦調査の結果の概要」15項)。
- (11) 1997年の第11回調査によると、結婚継続期間0~4年で2.33人、5~9年で2.47人、10~14年で2.58人、15~19年で2.60人、20~24年で、2.67人、25年以上で2.58人となっている(前掲調査結果の概要15項)
- (12) 厚生省情報部「人口動態統計」のデータによる。
- (13) 15歳未満の人口が12年連続で戦後最低を更新し、65歳以上の高齢者は人口の16.5パーセントで、昨年より0.5パーセント増加し、少子高齢化の傾向が鮮明になったと指摘している(朝日新聞1999年5月5日(水)第13版1項)。
- (14) ギネスブックによると、イタリア・ヴェテルボのロザンナ・デラ・コルタさんは、1994年に63才で男児を出生したといわれる。彼女は妊娠促進医療を受けていた。また、アメリカ合衆国のアーセリ・ケーさんも、1996年、63才のときに南カルフォルニア大学で出産したといわれている。彼女も妊娠促進医療を受けていた。(ギネスブック'99年版(きこ書房)84項)。
- (15) 国立社会保障・人口問題研究所「第11回出生動向基本調査・結婚と出産に関する全国調査・独身者調査の結果概要」2項。
- (16) 1992年の第10回調査までは、ある程度の年齢までには結婚したいと答える者が半数を超えていたが、1997年の第11回調査では48.6パーセントに減少した(前掲書2項)。
- (17) 平均初婚年齢の動きを見ると、1975年が24.7歳、1985年が25.5歳、1995年が26.3歳となっている(平成9年人口動態統計月報年計(概数)の概況、平均婚姻年齢の年次推移による)。
- (18) 厚生省大臣官房統計情報部編「婚姻統計(人口動態統計特殊報告)」(財団法人こう背統計協会、1997年)26項。
- (19) 夫婦間の平均出生児数は2.21で、1970年代から大きな変化はない(国立社会保障・人口問題研究所「第11回出生動向基本調査・結婚と出産に関する全国調査・夫婦調査の結果の概要」8項)。
- (20) 井上輝子・江原由美子編『女性のデータブック(第2版)』(有斐閣、1995年)によると、次のように指摘されている。…「結婚しないで子どもを産むべきではない」という規範は、若者の間でも強く内面化されている。近年若者性行動は活発になっているが、若者の同棲率や婚外出生率はきわめて低く、欧米と違って、結婚と生殖の結びは強く維持され、晩婚化のみが信仰している、との指摘がある。実際、アメリカでは25パーセント、スウェーデンにいたっては50パーセントもの婚外子出生率があるが、日本は一貫して1パーセント程度を維持している(同書12項参照)

